	名古屋大学農学部 同窓会報	発行所	名古屋大学農学部同窓会 名古屋市千種区不老町 http://www.agr.nagoya-u.ac.jp/~dosokai/
	セコイア通信	編集人	北 将樹・水口智江可
		発行人	安井 孝
		印刷所	株式会社 クイックス

農学部創立70周年に向けて

名古屋大学大学院生命農学研究科長・農学部長 川 北 一 人



名古屋大学農学部同窓会員の皆様には、日頃から大学院生命農学研究科と農学部の教育研究活動にご理解とご支援を賜り、お礼申し上げます。またこの春に卒業・修了を迎えた皆様に心よりお祝い申し上げます。

農学部は、2021年には創立70周年を迎えようとしています。

1951年の創立以来、学士10,000名、修士6,500名、博士学位取得者1,600名を社会に送り出してきました。この間、本学部・研究科を巣立った数多くの卒業生と教職員が今日の農学部・研究科の礎を築き、また多方面で活躍されています。学部は、1968年までに確立した農学科、林学科、畜産学科、農芸化学科、林産学科、食品工業化学科の6学科の時代から、1993年からの2学科体制（資源生物環境学科、応用生物科学科）を経て、2006年から現在の学部3学科体制（生物環境科学科、資源生物科学科、応用生命科学科）となりました。また、大学院は、農学研究科から1997年の大学院生命農学研究科（生物圏資源学専攻、生物機構・機能科学専攻、応用分子生命科学専攻、生命技術科学専攻）への改組を経て、2018年に新しい4専攻体制に組織再編しました。「森林・環境資源科学専攻」「植物生産科学専攻」「動物科学専攻」「応用生命科学専攻」という学術研究領域に基づく体制になり、学部との対応関係もわかりやすくなったかと思えます。学術研究や大学教育に関する社会的要請は刻々と変化しており、本研究科においても、将来展望のもとに教育研究の目標を定め、研究科の特色と存在感を明確にすることが重要となっています。

名古屋大学は2019年に創立80周年を迎えます。本学は2018年3月に文部科学省から指定国立大学法人の指定を受け、世界屈指の研究大学を目指しています。その構想の柱の一つとして、東海国立大学機構を設立し、2020年4月を目処に岐阜大学と間で法人統合を行うことがあげられています。それぞれの大学の特色を活かした自律性を確保しながら、両大学の持つ機能とリソースを東海地域に展開し、大学のみならず地域、産

業、行政などの発展に繋げようとしています。特に名古屋大学と岐阜大学の農学分野にはそれぞれの強みがあり、独自性を尊重しつつ補完関係を築いて教育研究の機能強化を図りたいと考えています。また、名古屋大学が位置する中部地域は、世界を代表するものづくり産業の集積地であるばかりでなく農業においても主要な生産地域であり、食品加工産業も盛んです。東海地域における農学領域のプラットフォームとして「東海農学ステーション」を創設し、大学・産業界・地域の密接な連携を通して東海地域の農業の発展を支援する研究拠点としたいという構想を描いています。また、名古屋大学はアジアサテライトキャンパスを展開しており、フィリピンやカンボジアのサテライトキャンパスの農場を先駆的に国際共同利用化し、遺伝資源の活用や新たな教育研究や人的交流の拠点とするという構想も計画しています。

農学部創立70周年に向けて、学部・研究科とも、教育研究の一層の発展を目指して、その活動を活発化させていく所存です。同窓会も大きく変わろうとしています。学部・研究科の活動状況や研究のシーズについて情報発信するとともに、同窓生の活躍を把握し、同窓生間や同窓生と在学生の間の情報交換と交流の場を提供していきます。同窓生の皆様も学部・研究科を身近な存在として活用していただきたいと思っています。また、本研究科は、名古屋大学特定基金として「教育研究基金」を設置し、農学部・生命農学研究科の在学生の学業を支援する各種奨学金制度を設けています。次世代の育成に向けてご理解とご協力を是非ともお願いいたします。

名古屋大学農学部同窓会長あいさつ

安井 孝 (昭和47年林学卒)

名古屋大学農学部同窓会会員の皆様におかれましては、平素より大学院生命農学研究科と農学部の活動に対して深いご理解と多大なご支援を頂き、厚く感謝申し上げます。

そして、この3月に学部・研究科を卒業・終了される方々にお祝い申し上げるとともに、正会員として入会を歓迎いたします。また、学部・研究科で学び・過ごした日々および出会いを大切に、同窓の絆を熟成させて頂くこと、さらには、大学に積極的な支援を頂くことをお願いいたします。

同窓の意識は新たな人間関係を生み出すきっかけになります。同窓会はこの橋渡し役を中心に懇親組織として活動を行ってまいりましたが、平成30年度からはこれに加え、大学教職員のご理解とお力添えを頂き、更に、各年代の会員からなる評議員会を立ち上げ同窓会の運営に関与して頂くなど、大学が次世代の人材をしっかりと育成していくための支援組織として活動出来るような同窓会の体制に強化されたところであります。

この大きな変革の中、平成29・30年度同窓会の会長を無事務めさせて頂きました、ご協力ありがとうございました。心からお礼申し上げます。

2019年からの同窓会総会は10月、大学のホームカミングデーに合わせ開催いたしますので会員皆様の積極的な参加をお願い致します。

さて、昨年は、私が昭和47年林学を卒業、森林に関する技術者としてスタート、その後大学や同窓生との思わぬ繋がりに支え続けられ、退職年齢を過ぎたといわれる現在も森林防災一筋、現役の技術者として活動していることを述べさせて頂きました。

この活動の中、昨年は一年の漢字に「災」が選ばれたとおり自然災害が多発した年で、西日本地区においては、2月の福井豪雪、4月の島根県西部地震、6月の大阪北部地震、7月の西日本豪雨、そして9月の台風21

号・24号、いずれも手入れ不足と言われる森林に起因した大きな被害があり、その対策に取り組みながら活動の未熟さに心を痛めたところであります。

中でも予想外の被害と感じた出来事は、9月30日から10月1日にかけて東海地方を襲った台風24号、強風の影響で多くの森林で倒木等があり、浜松市、豊橋市などでは停電が発生、全面復旧には4日間も要し、暫くは電気がない生活が続くといった近年類を見ない被害が発生した事で、この種の対策も含めた森林の管理について一層の勉強が必要と感じました。

皆様ご存じのとおり国内の森林(人工林)の現況は、木材資源は充実し利用期を迎えているにも拘わらず、林業の採算性の悪化などにより森林所有者の積極的な経営や適切な管理が期待できず、多くの森林において手入れが不足し荒廃傾向にあります。

ここ暫くは森林の公益的機能を確保する名目で、環境面(森林環境税の投下)から行政が森林の手入れを先導していく状況となっていますが、やはり過去の林業を礎に新たな林業を発想し、持続出来る木材資源生産活用型の森林の管理方法に主体を移行するのが当然であり、そのための研究や教育(理論と技術)の展開—森林管理の集約・機械化、農地を活用した平地森林の造成等々—が必要と思います。林業を扱う林学科は近年二人もの林野庁長官を輩出した学科にも拘わらずいつの間にか名古屋大学農学部から無くなってしまったのでしょうか?現学部・研究科においても、国内の森林を環境資源として捉えるだけでなく物質資源としても捉え、森林経営学や造林学を対象とした研究者の育成・輩出を囑望するところです。

頑張れ名古屋大学農学部、改めて今後の同窓会の活動に会員皆様のご理解とご協力、そして大きなご支援をよろしくお願い申し上げます。

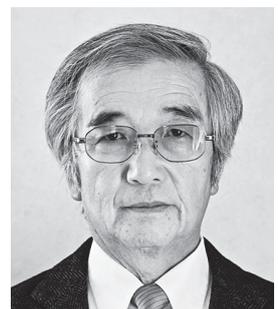


定年を迎えるにあたって

生物機能開発利用研究センター(有用農業形質保存) 北野 英己

本年3月で定年退職することになりました。これを機会に私の教員生活を少し振り返ってみようと思います。私は1972年に本学農学部に入學、大学院は栽培原論及び育種学研究室の蓬原雄三先生のもとでイネの研究

をスタートしました。博士課程を終えた後も当時は専門職を目指すなら何年続くか分からないオーバード



クターを経験するのが当たり前のような雰囲気があり、自分もそれを覚悟していたのですが、好運にも愛知教育大学の生物学教室に職を得ることができました。赴任先では基本的には一人一研究室体制で教育のノルマ以外研究は自由という環境でしたので、引き続きイネの研究を続けることが出来ました。しかし、前任者が植物分類学の専門家であったからか、あてがわれた研究室には標本棚と実験台があるくらいで研究に使えるような器機や道具類は殆ど期待できない状況でした。

まさに裸一貫でスタートを切ることになったのですが、当時は不思議なくらい絶望感は無く、まだ若いからここで何が出来るかじっくり考えて行こうと暢気に構えていたような気がします。お金をかけずに紙と鉛筆と物差しだけでも楽しめる研究を考えると、学生時代から馴染んでいた突然変異誘発による研究素材の開発とそれらを使った遺伝学ならできるかもしれないと思い、出身研究室に出向いてはイネの変異原処理をお願いし、時には研究に必要な消耗品を現物支給して貰ったとも何度かありました。

毎年、私の研究室に来てくれた学生達とひたすら突然変異体の作出に取り組み、毎日一緒に圃場に出るは“欠陥”イネの姿を観察し続け…、気付いたら既に16年が経っていました。この間、新学科創設を目指す改組など、大学運営に関わる仕事にも関わらせて頂きました

たが、学内の意見を二分する嵐が吹き荒れる中で実に色々なことを学び貴重な経験をすることができました。

教員人生の折り返し点に差し掛かった1997年には、改組で再スタートしたばかりの生命農学研究科からお誘いを受け、助教授として古巣に戻ることになりました。当時のイネ研究も分子生物学が主流になりつつあり、地方大学での16年間のブランクを埋めこの流れに乗ることはとても出来そうにもないと悩んでいた頃、2002年には附属農場（東郷フィールド）に籍を移して学生実習や農場の管理運営に携わることになりました。ここでは、これまでの生産農場の経営から研究支援農場へと方向転換を明確にするため、農場スタッフの意識改革を進めるとともに利用者拡大のため関連研究室詣でに尽力しました。さらに2004年からは、改組で生物機能開発利用研究センターに新設された有用農業形質保存分野を担当することになり、今度はセンターのイネ研究を支える立場からそのまま農場に常駐して両部局間のネットワーク構築に努めることになりました。

短期間に三つの専攻を渡り歩くことになってしまいましたが、今日まで一貫してイネの研究を続けられたことが何よりの幸せであり、このような環境を与えて頂いたセンターおよび生命農学研究科の皆様には多大な感謝と同時に今後の益々の発展を期待したいと願っています。長い間お世話になり有り難うございました。

定年退職を迎えて ～思い出あれこれ～

応用生命科学専攻（分子細胞制御学） 牧 正敏

1994年12月に名古屋大学農学部教授として着任して以来、あっという間に24年が過ぎ去ってしまいました。着任当時は自分の定年退職は遙かに遠い先のことでとても想像ができなかったのですが、月日が経つのは本当に速いですね。昔は「停年退官」という言葉が使われ、「停年」と「定年」の違いを論じられた先輩教授もおられました。その内容が何であったかは忘れましたが、「退職」になったのは、もちろん大学の法人化に伴って私たちの身分が「教官」から「教員」になったためでしょう。これもすっかり定着しました。さて、着任した頃の頃、家族が住む大津の自宅に戻っていた私は1995年1月17日の早朝、「あっ、家が壊れる！」と感じるほどの大地震（阪神・淡路大震災）で目を覚まされました。震源地から遠く家は無事でしたが、当然のことながら東海道線は一部不通となりました。科研費研究会議のためその日のうちに東京へ出向く必要があり、復旧の早かった近鉄で京都から奈良経由で名古屋へ出て新幹線に乗り換えた記憶があります。また、その年の3月には地下

鉄サリン事件が起こり、何とも不安な世相でした。しかし、4月からは卒論生を迎えて無事新しくスタート

することができました。分子細胞制御学研究室は、それまでの6学科制から2学科制へと学部改組によって応用生物科学科に新設された講座でしたので、最初は私と卒論生を入れてたったの3名、そして秋には人見助教授（現、創薬科学研究科教授）を加えても4名、ひとつの四角いテーブルで忘年会が開けるという本当に小さな研究室からの出発でした。その後、助手（助教）（現、柴田准教授、高原講師）の加入もあって研究室規模は段々と大きくなり、卒業生総数も今や120名を超え、学生たちの同級生、先輩、後輩の関係がもはや名簿を見ないと分からなくなってしまいました。卒業生はともかく、眼前の現役の学生の名前がさっと出て来ないことがあったときは、これはやばいなと思うことも何度かありました。私がまだ学生の頃、研究室の教授と話



をしていて名前と呼ばれずに、君、君と呼ばれ続けたことがありましたが、あの時は多分...で今更ですが納得する次第です。研究室名は発足当初からの名称で変更はありませんが、所属する大学院研究科の専攻名は、農芸化学、応用分子生命科学、応用生命科学と変わりました。研究室の場所も農学部研究棟耐震工事等や研究科の再配置都合のため、3年前に4か所目の現在のA

館西棟5Fへと移りました。お陰様で個人所有の書籍の一部はいまだに段ボール箱に入っており、退職時の整理が楽になりました。私が着任して以来、6人の現役教授が定年退職を迎えることなく逝かれ、それを見送って来ました。私は元気に退職でき大変幸せなことだと思います。長い間お世話になりました。学部・研究科ならびに本同窓会の益々のご発展を祈ります。

研究での道草と教育での Less is More

応用生命科学専攻（細胞ダイナミクス） 前島正義

農学部、生命農学研究科には、米国1年弱と北海道大学低温科学研究所での6年間を除いて、28年間教員としてお世話になりました。大学本部での職務もありますが、ここでは研究と教育を振り返ります。

研究室では卒論生と大学院生が自由に進められるテーマを心がけました。私が博士課程で挑戦した生体膜タンパク質の研究を大事な視点として、北海道大学では植物の液胞膜プロトンポンプ（液胞を酸性化する酵素H⁺-ピロホスファターゼ）と、後に水チャネルであることが判明した膜タンパク質の研究を開拓しました。いずれも世界最初の単離と特性解明であり結果的に反響の大きな成果となり、研究費獲得につながり、大隅良典先生も加わった総合研究を代表する機会も得ました。研究所では指導院生数も授業担当も少なく、低温棟の1階にある狭く、夜間にはネズミも徘徊する実験室で1日の大半を過ごしました。その分、試行錯誤ができ、たとえばショ糖の輸送体をダイコンとサトウダイコンの比較をしつつ同定しようとの計画で、研究所周りに2つの作物を栽培し実験材料としました。こちらの計画は頓挫しましたが、道草をしつつも研究の醍醐味を知った6年間でした。

1994年に本学に赴任し研究も大きく広がりました。一方で授業担当と指導生が増え教育のウェイトが重くなりました。学生の自由度を確保するために研究対象を広げて、国内外のトップ研究者と共同研究をするというスタイルとしました。院生には外に目を向けても

らい、ネットワークが広がり、私の指導力不足を補っていただくことになりました。原著論文188編、総説等60編を発表しましたが、共著者は400名（うち外国人研究者110名）を超え、研究室メンバーと共同研究者に支えられてきました。

学部3年生は毎日午後に学生実験がありますが、1年の間に学生が大きく変わる姿も垣間見ました。講義では生物化学等の科目を担当し、私の恩師旭正先生の流儀を守り定期試験後の答えは学生に返却しました。大講義室では150名を越す学生の名前と顔を一致させることは困難でしたが、答案と共に学ぶことの面白さも受けとってくれたと感じています。標題の“Less is More”（少なく教えて豊かに学ぶことにつながる）は、ハーバード大学の先生から教えていただきました。大学教育も日進月歩の知識を詰め込むため、じっくり考える時間を与えていないのかもしれませんが、「青年は教えられることよりも刺激されることを求める」はゲーテの言葉ですが、学生は教えを超えて自ら考え出すことで強い自信を得るとも感じます。私にも同様の機会が何度かありました。

「涙とともにパンを食べた者でなければ人生の味はわからない」（ゲーテ）の言葉通り、起伏の大きな年月は人生を豊かにしてくれると感じます。同窓会の皆様からのこれまでのご厚情にお礼申し上げます。



定年退職を迎えて

応用生命科学専攻（栄養生化学） 下村吉治

名古屋大学大学院医学研究科（現、医学系研究科）博士課程（生化学第二（現、分子細胞化学）研究室）を昭和58年に修了し、次いで同研究室の助手に着任したのが、私の最初の就職でした。その後、昭和62年に

筑波大学講師、平成4年に名古屋工業大学助教授（その後教授）を経たのち、平成20年8月に本学生命農学



研究科（栄養生化学研究分野）教授に就任し、この年度定年退職を迎えることになりました。これまでに、名古屋大学には約15年間、生命農学研究科には約11年間教員としてお世話になりました。私の専門は、生化学を基礎とした栄養学ですが、名古屋大学の教授になる前までの所属は栄養学と直接関係する学部ではなかったため、ここに就任した時自分の専門と研究室の看板名がやっと一致しました。このような経歴の私を迎え入れて頂いた生命農学研究科に大変感謝しています。そのお陰で私の研究および学会活動は大いに発展したと感じております。

私が研究人生の大半を費やす対象として選択したのは、分岐鎖アミノ酸（Branched-chain Amino Acids (BCAA)：ロイシン、イソロイシン、バリン）です。実際の研究は、BCAAの代謝系酵素の精製とその活性調節機構、およびBCAAの生理機能についてですが、30数年前の研究着手当時に比べて、現在ではその代謝系は大部分明らかになり、BCAAの生理機能についてもタンパク質構成成分としてだけでなく実に多くの機能が明らかになりました。このBCAA研究開始のきっかけは、昭和58年に米国Indiana大学医学部生化学講座のDr. Robert A. Harris教授が名古屋大学医学部の客員教授として来日した時に、私がHarris教授の研究補助をすることになったことです。Harris教授は、当時からBCAA研究の世界的権威でした。私の当時の研究対象はミトコンドリア電子伝達系酵素（Complex III）でしたので、Harris教授の研

究補助をすることには大分戸惑いがありました。しかし、これが因で私はHarris教授の研究室へポストドクとして留学できることになり、さらにライフワークであるBCAA研究にも出会いました。Harris教授は既に退職され一線を退いていますが、現在でも私は彼と連絡を取り共同研究しています。これらの経験より、同窓会の若い皆様にはここで改めて「人の出会い」の重要性を強調したいと存じます。

さて、生命農学研究科で勤務した最後の4年間、私は評議員（副研究科長）に選任され、研究科執行部の一員として活動しました。この間、研究科は大学院改組に着手し平成30年4月よりそれを実施しました。同時期に、名古屋大学は指定国立大学法人に指定され、その構想の重要な項目の一つである「東海国立大学機構」設立に向けて岐阜大学との連携の検討に入りました。実に大きく大学が変化していく様を目の当たりにしました。今後もこの大学改革は進行していき、更に加速していくと思われまふ。おそらくは後世に名古屋大学が国立大学改革の初陣を切ったと言われ、名古屋大学が飛躍的に発展していることを期待します。現役の研究科教員の皆様には実は大変な時代を迎えたと言わざるを得ませんが、歴史的に重要なイベントでありますので、大きなエールを送りたいと思ひます。

名古屋大学生命農学研究科には、長年に渡りお世話になり感謝申し上げます。また、今後の名古屋大学を見守りたいと存じます。

森林と水を求めて

森林・環境資源科学専攻（森林水文・砂防学） 太田 岳史

2001年4月に岩手大学から名古屋大学に転任して18年の歳月が経ちました。退職を前に、研究の為にこれまで訪れた地を少しだけ振り返ってみようと思ひます。

- 1) ヒマラヤ…1985年冬～1986年春。第1回目の海外調査。標高7,000m級の山々が聳える地。氷河の浸食量調査の為にランタンヒマールのベースキャンプ（BC。標高約4,000m）で越冬する。山小屋の中で聞いた「ジョニーへの伝言」に心打たれ高橋真梨子のファンになる。
- 2) 中国南東部…1980年代終わり頃。森林科学系の調査。毛沢東の故郷である江西省、九連山の某河川について量水堰の設計図を2枚描き実際に建設された。2カ月の滞在中に麻雀を覚える。
- 3) インドネシア…1990年代始め頃。砂防関係の調査。

ジャカルタから飛行機で1～2時間のジョグジャカルタ。初めての火山調査（メラピ火山）。磐梯山との比較研究も行う。ホテルから見た南十字星が綺麗だった。

- 4) 中国西部…1989、1991、1993年。チベット高原の揚子江源頭タングラ山脈北面の調査。上海から蘭州へ飛行機で行き西寧までは鉄道、パジェロで青海湖を超え格爾木（ゴルムド）を通過してBC（標高約5,200m）へ。BCは青海省とチベット自治区の州境にあるタングラ山口（標高約5,600m）の手前にあり、高地順応をしながら一週間かけて移動した。一度だけチベット自治区、安多へ。調査中の1989年に天安門事件が勃発し、日本政府の命令により日本人は撤



退帰国。しかし蘭州で一週間飛行機が飛ばないなど、帰路は珍道中で面白かった。

5) ナミビア…2009、2013年。混作農業に関する水文現象の役割の研究。南アフリカ共和国の北に位置する国。日本から香港、ヨハネスブルグを経て首都ウインドフックへ。調査地はさらに飛行機で2時間のオシャカチ。雨季と乾季がはっきりしていた。ステップ（植生状態の名称）の土地と、非常に多く生息する野生動物を目の当たりにして感激。

6) ロシア…1994～2018年。水・エネルギー・炭素循環の調査。地球温暖化にとって非常に重要な課題である。個人的には50回ほど訪露。日本から飛行機で6時間、レナ川中流ヤクーツクを中心にチクシ、ティンダ、ウスティ・マヤで調査。初期は橋も道路もなく、山中の調査地への移動はモーターボートと

プロペラ機を利用。食事は地元の人を雇用してロシア料理。当時は社会主義の影響で、買い物も仕事のやり方も日本とは大きく異なり苦勞した。今ではある意味で日本よりも自由化が進んでいる。2018年に、ロシア科学アカデミーシベリア支所寒冷圏生物問題研究所から感謝状と一緒に頂いた記念品の剣は、非常に嬉しかった。

最後に、2010年に患った脳梗塞は私の生き方をいい意味で大きく変えました。それ以前の研究生生活は勿論のこと、復職後も多大なるご迷惑をおかけしましたことをお詫び申し上げますと同時に、これまで支えて頂きました多くの諸先輩、同僚、事務・技術職員の方々、そして学生の皆様に心から感謝申し上げます。本当に有難うございました。

定年を迎えて

動物科学専攻（動物形態学） 大森 保成

名古屋大学農学部畜産学科に入学して47年、教員に採用されて36年余り、本当に長い間お世話になりました。幸い健康にも恵まれ、今日まで無事に過ごすことができました。研究室名も生体機構学から動物形態情報学に、さらに動物形態学に変わりました。

この間、私は主な研究材料としてニワトリを用いてきましたが、最初にニワトリと出会ったのは学生実習の解剖でした。ホルマリン固定したニワトリの足には「神宮」と書いた木札が取り付けられていました。「神宮」はニワトリの系統名でもないし、不思議に思いましたが、研究室に所属すると疑問が解明しました。農学部の運転手付きトラックに乗り、先輩に連れられて熱田神宮までニワトリを受け取りに行きました。熱田神宮ではご神鶏としてチャボを放し飼いにしているため、夜店などでペットとして売られたヒヨコが大きくなって境内に捨てられることが多く、当時はこれを研究室で引き取っていました。「神宮」のニワトリは研究材料としても、大いに利用しました。

私は学生時代も含めて、研究室の歴代の教授すべてから教えを受けました。保田教授、藤岡教授、渡邊教授、福田教授、本道教授です。大村先生、蛭薙先生、内藤先生、井上先生とも同じ研究室で一緒になりました。助手の時代が長かったですが、このように多くの先生方のもとで自由に研究できたことに感謝します。この間に研究室に入った150名以上の学生さんと研究室での教育研究を通して関わることができ、私の掛け替えのない財産となりました。私の担当した学生実験や講

義を受講した学生さんにはもっと多くいますが、拙い指導で良かったのか、反省すべき点が多くあります。

研究室では昭和27年から文部省事業として「家鶏・野鶏系統保存事業」を行ってきました。学生時代と教員になった当初は鶏舎でのニワトリの管理や世代交代のためのヒヨコの育成に多くの時間と労力を注ぎました。その後、紆余曲折があり、研究室は系統保存事業から離れましたが、再びニワトリの系統維持に携わることになったときは動物系の研究室の皆さんにニワトリの世話を協力していただき、大変なご迷惑をおかけしました。これ以上周りに迷惑をかけたくないので、保存事業を中止するよう当時の教授にお願いしていましたが、「家鶏・野鶏系統保存事業」が発展して、鳥類バイオサイエンス研究センターの設置とナショナルバイオリソースプロジェクト「ニワトリ・ウズラ」の中核的拠点の採択につながりました。全国の研究者にニワトリとウズラの研究材料を提供しており、今後ますますの発展が期待されます。系統保存事業を中止しなくて本当に良かったです。

大学を取り巻く環境は厳しいですが、博士後期課程に進む学生が少ないことが気がかりです。研究者を目指す学生が育ってこそ、大学の未来が開けます。研究者の道が学生にとって魅力あるものになり、生命農学研究科がますます発展することを願っています。



2019年度名古屋大学農学部同窓会 評議員会、総会、講演会、懇親会のご案内

今年度は名大祭期間中ではなく、名古屋大学ホームカミングデーに合わせて開催いたします。詳細は、農学部同窓会 セコイア会 HP (<https://www.agr.nagoya-u.ac.jp/~dosokai/>) にてご案内いたしますので、後日ご確認ください。

○評議員会

日 時：2019年10月19日（土） 昼頃
場 所：名古屋大学農学部

○総会、講演会

日 時：2019年10月19日（土） 午後
場 所：名古屋大学農学部

○懇親会

日 時：2019年10月19日（土） 夕刻
場 所：名古屋大学農学部（予定）

連絡先：農学部同窓会 総務 水口智江可
メールアドレス：c_mina@agr.nagoya-u.ac.jp

同窓会を開きませんか!?

農学部同窓会総会を機に、久しぶりに農学部に集まって同窓会を開催しませんか？

農学部同窓会の懇親会を1次会としてご利用いただくことができます。是非、同窓会事務局（dosokai@agr.nagoya-u.ac.jp）まで事前にご連絡下さい。必要に応じて、同窓会ホームページを掲示板としてご利用いただくこともできます。

農学部第15回卒業生および修士第13回卒業生の卒業50周年記念祝賀会の案内

農学部第15回卒業生および修士第13回修了生の50周年記念祝賀会は、名大祭期間中ではなく、名古屋大学ホームカミングデー（2019年10月19日）に合わせて開催する予定です。後日、祝賀会へのご招待状を送付させていただきます。懐かしい先生方にもご参加いただけるかと思っておりますので、万障お繰り合わせの上ご出席ください。祝賀会、講演会、懇親会に関する情報は、農学部同窓会ホームページに掲載いたしますので、ぜひご覧ください。

平成30年度 同 窓 会 役 員

名誉会長	川北 一人（研究科長・学部長）	会 計	邊見 久（応用酵素学）
会 長	安井 孝（学外）		田中 隆文（森林水文・砂防学）
副 会 長	福島 和彦（森林化学）	名 簿	江原 宏（熱帯生物資源）
同窓会活性化特任	服部 束穂（植物細胞機能学）	ホームページ	一柳 健司（ゲノム・エピゲノムダイナミクス）
関東支部	石川 靖文（学外）	会 報	北 将樹（天然物ケミカルバイオロジー）
関西支部	加藤 壽郎（学外）	会計監査	山本 一清（森林環境資源学）
総 務	水口智江可（害虫制御学）	事 務	宮田 久代（動物生殖科学）
	山本 浩之（木材物理学）		

卒業生の言葉

学生生活から学んだこと

生物環境科学科 木材物理学研究室 高見里奈

早いもので、私が名古屋大学に入学してから5年の月日が経とうとしています。初めはついていくことで必死だった大学での勉強や厳しい上下関係を学んだ体育会ゴルフ部での活動など、最初の2年間でも社会に出る上での厳しさや楽しさをたくさん学びました。しかし、最も私の人生に影響を与えた出来事は、1年間休学をしてオーストラリアでワーキングホリデーをしたことです。『生きる力』を身につけたいと思い、日常で使える英語に触れる機会が多く、海外での就業経験が積めるワーキングホリデーを選びました。

初めの3か月は語学学校に通いながら、これまでの人生で触れてくることのなかった言語、文化、価値観への理解を深めました。語学学校修了後はすぐに仕事探しを始めました。現地で仕事を探すときは、働きたい場所へ履歴書を直接渡しに行くことが一般的であり、毎日何十軒も配り歩いたこの経験が本当に私の忍耐力を鍛えてくれました。

また、現地で生活を始めてから1年間を通して行っていたことがあります。それは、植林ボランティアです。幼い頃から自然に囲まれて育った私は、昔から植物が好きで大学に入学してからその思いは強まってきました。その為、広大な自然を持つオーストラリアは私にとって絶好の機会でした。現地の住民の方々とオーストラリアのシンボルであるユーカリを街の中に植林し、植林後には公園でBBQを楽しみました。日本での生活に比べて、自然と人の距離が本当に近くて、生活スタイルが変わりつつある日本においてこのような環境が今後もっと必要になると感じるようになりました。

帰国してからは、木材物理学研究室でユーカリ属を用いて研究に励み、就職活動では都市緑化に特化した企業への就職を決めました。大学生活で経験した1つ1つの出来事を活かしながら、今後も目標に向かって強く生きていきたいです。



最後に、私が卒業という日を無事に迎えることができるのは、入学時から切磋琢磨してきた学部学科の友人、体育会ゴルフ部の仲間・OBの方々、木材物理学研究室の皆さま、またどんなときも温かく見守ってくれた家族のおかげです。本当にありがとうございました。

4年間の大学生生活

資源生物科学科 ゲノム・エピゲノムダイナミクス研究室 橋本拓磨

少し肌寒くなってまいりました今日この頃、ふと気づけばいつの間にやら私奴は学部4年生になっており、卒業まで一足ではありませんか。入学したのがつい数舜前のことに思われるほど、大学での4年間というのは高速で過ぎていきました。楽しいことは時間を忘れるくらいあっという間に終わりを迎えてしまいます。私奴にとって、名古屋大学様で過ごしたこの4年間は濃密で幸せな時間であったということでもあります。

私奴が4年間で得た一番の宝物と聞かれれば、迷うことなく、人との出会いだった、とお答えいたします。大学で学んだ学問も重要ではございますが、その知識は後からでも獲得できるもの。4年間で出会った人々との出会いというのは、これは再度手にいれることのできないものであり、とても貴重なものなのでございます。大学で様々な人と会話を交わすことで、それまで見てきた自分だけの世界に新たな刺激と価値観を与えてくれるのです。

その中でも、ひと際思い出に残るような出会いがあったとすれば、それは海外実地研修で出会ったタイ・カンボジアの生徒達でしょう。彼らは我々日本人とは違います。異なる文化と異なる環境で育ってきているのですから。彼らの考え方にはよく驚かされました。私達日本人のステレオタイプな考え方ではなく、より斬新な考え方で物事を進めていくのです。私は英語が満足に話すことができなかつたのですが、それでも短い研修の中で彼らと日本人の友以上に分かり合うことができました。彼らとの交流によって、エキゾチック



な視点を持ち、人となりをより理解する術を身に着けました。これらの出会いを通じて、より私自身が味わいのある人間になったと確信をもって言い切ることができましょう。

最後になりましたが、たくさんの人々が支えてくださったおかげで実りある大学生活を送ることができました。研究室および講義で指導していただいた先生、先輩方、ならびにともに切磋琢磨した大学の友人、そしていつも心の支えになってくれた家族に感謝を申し上げます。

名古屋大学での思い出

応用生命科学科 天然物ケミカルバイオロジー研究室 武仲敏子

名古屋大学に入学してからもう4年の月日が流れました。入学当初は新しい環境で上手くやっていけるか不安でしたが、大学生活に慣れるのにそんなに時間はかかりませんでした。振り返ってみると数えきれないほどの思い出を残すことが出来ました。

私は部活動を通して様々な経験をする事ができたと感じています。私はフィギュアスケート部に所属していました。初めは上手く出来ませんでした。練習を積み重ねていくと少しずつ滑れるようになり、どんどんスケートにのめり込んで行きました。上級生になると自分の練習だけでなく、部の役職にも取り組み、仕事を通じて成長出来ました。なにより個性的なメンバーのおかげで密度の濃い時間を過ごせたと思います。

印象に残っている出来事として、2年の時に参加した中国語スピーチコンテストがあります。1年の時の中国語の授業が楽しかったこと、大学生のうちに何かに挑戦したいと思ったのがきっかけでした。中国出身のTAさんに協力してもらい、本番まで1ヶ月間猛練習しました。練習は大変でしたが、その分本番にはリラックスして臨むことができ、なんと賞をいただきました。副賞の中国旅行では、現地の学生と交流したり観光を楽しんだり充実した時間を過ごせました。このような機会を与えてくれた名大と南京大学の双方に感謝の思いで一杯です。

普段の講義では高校の時より遥かに専門的な知識を得ることが出来ました。新たな発見があった時や複数



の授業の内容がリンクした時など、自分の理解が深まっていくのはとても楽しかったです。4年生になると、卒業研究が始まりました。教授に実験操作を教わる機会も多く、学部生ながらポスター発表の経験もさせていただき、様々な技術を身につけることができました。

最後になりましたが、研究室の教授とメンバー、友人、家族を含む私に関わってくださったみなさんに心から感謝しています。今までありがとうございました。

長い学生生活を終えて

生物圏資源学専攻 森林資源利用学研究室 森 雅典

名古屋大学の学生としての時間が終わりを迎えようとしています。1年間休学を挟んだこともあるかもしれませんが、とてつもなく長い学生生活だったな、という印象です。この文章を書くにあたり、名古屋大学の学生として自分は何をしてきたか、思い返してみました。恥ずかしながら、恥や後悔が何よりも最初に押し寄せてきます。ここでは書けないほどの数の単位を落としたり、バンドサークルを同期の技術の上達についていけず逃げ出したり、なんとなく人間関係がうまくいかなかったり、他にも数えきれない失敗や後悔をしてきました。ですが、もちろん楽しかった思い出もたくさんあって、名大祭の実行委員として仲間とぶつかりながら企画した後夜祭は人に自慢できるほどの素晴らしいステージでしたし、休学を終えて大学に戻ってから一緒になった年下の同期は今でも仲良くしてくれています。大学院に入ってから海外での研究や学会発表も貴重な経験でした。そんなことを思い返すと、失敗は全て自分の責任で、良い思い出は全て周囲の人たちのおかげだったことに気がきます。幸運にも私の周りには力を貸してくれる同期、後輩、先輩、先生方がいました。逃げ出すことも多い学生生活でしたが、時に逃げずに立ち向かったことで、多くの尊敬できる方と会うことが出来ました。その方々から学んだことを自分の糧にして、社会人になってからもまた多くの出会いがあるよう、目の前の壁から逃げずに立ち向かっていきたいと思います。



〈教授や後輩たちとインドネシアの調査地へ向かう船での一枚〉

平成30年度総会、講演会、懇親会の報告

平成30年6月9日（土）、農学部第3講義室において総会を行いました。平成29年度の事業・決算報告を行った後、平成30年度役員を選出し、平成30年度事業計画・予算を審議しました。総会終了後、吉木淳氏〔理化学研究所バイオリソース研究センター実験動物開発

室 室長、第31回（昭和60年3月）農学部畜産学科卒業〕による講演会「実験動物マウス：高次生命機能の解明と疾患克服のためのモデル生物」を開催しました。講演終了後、レストラン花の木にて懇親会を開催し、親睦を深めました。

農学部第14回卒業生および修士第12回卒業生の卒業50周年記念祝賀会の報告

平成30年6月9日（土）、名古屋大学農学部大会議室において、農学部談話会との共催により農学部第14回卒業生および修士第12回修了生の卒業50周年祝賀会を開催いたしました。20名の卒業生の皆様をはじめ、談話会会員、現職員、および同窓会役員合計48名の出席で盛大に行われました。祝賀会では、同窓会会長 安井孝様、ならびに生命農学研究科長・農学部長 川北一人教授よりご挨拶をいただきました。続いて農学部

談話会 服部重昭先生の乾杯のご発声の後、昼食、歓談となりました。出席いただいた方々から自己紹介と近況についてのご報告をいただき、会は和やかな雰囲気の中進行しました。また、互いの旧交を温めておられました。昼食後は、生命農学研究科 磯部稔名誉教授より、「アジアにおける教育と研究の現状 一有機化学とその周辺一」と題したご講演をいただきました。



ホームカミングデー 農学部同窓会関連行事報告

—農学部同窓会評議員会および同窓生在籍企業紹介—

去る10月20日、名古屋大学ホームカミングデーの日に表題の2つの行事が開催されました。以下その概要を報告します。

●名古屋大学農学部同窓会（セコイア会）評議員会
日時：2018年10月20日（土） 12：00～13：00
場所：農学部大会議室

同窓会会則では、各卒業年度の各学科または各専攻につき1名の評議員を置き会長が評議員会議を招集することになっています。過去にはこれに従い評議員が選ばれていたはずなのですが、長い間新たな評議員が選出されない状態が続いた上、過去に選出された評議員の記録も残っていませんでした。そこで、今回新たに評議員を選出しなおし、毎年評議員会を開催することで、会員の同窓会意識を高め、会員からの意見を同窓会活動に同窓会意識を反映させることで会の活動をより活発なものにしていくことにしました。過去に評議員を任命されその自覚をお持ちの会員の方もいらっしゃると思いますが、現状を鑑みご容赦頂きたいと思っております。



〈評議員会の様子〉

新たな評議員選出に当たっては、現在の研究室の教員から、今も研究室とつながりがあったり、連絡可能な方で同窓会運営に協力頂けそうな方を推薦頂き、評議員就任を快諾頂いた方をお願いいたしました。各研究室からの推薦をもとに174名の会員の方々に依頼しましたところ90名の方に評議員就任をご快諾頂きました。このうち今回の評議員会には60名の方々にご参加頂きました。お忙しいところ、また、遠方よりお集まり頂いた評議員の皆様には心よりお礼申し上げます。

他の行事との関連で、昼食を取りながらの1時間という短時間の会議で、ほとんどの時間を、経緯や同窓会の現状と問題に関する説明に費やさざるを得ませんでしたが、評議員の皆様からも、今後の会の運営にとって貴重な意見を多数頂きました。再出発したばかりの評議員会で不備な点多々ありますが、本会の活発化の原動力となっていくことを期待しています。

評議員会でもご了承頂きましたが、これからは評議員会に加え、毎年名大祭の日に行っていた総会・懇親会も毎年10月第3土曜日のホームカミングデーの日に開催することになりました。この日が農学部同窓会会員が様々な形で集う日として定着していくことを願っています。

●同窓生在籍企業紹介

日時：2018年10月20日（土） 13：30～14：20
場所：農学部第5講義室

この企画は生命農学研究科が全学同窓会支援事業のサポートを受けて主催し、農学部同窓会の共催という形で開催されました。同窓生が活躍する12の企業から同窓生の代表にきて頂きポスターによるプレゼンをお願いしました。

参加して頂いた企業は以下の通りです。

・コニカミノルタ株式会社

- ・日本製粉株式会社
- ・大建工業株式会社
- ・兼房株式会社
- ・クミアイ化学工業株式会社
- ・株式会社三祐コンサルタンツ
- ・愛知製鋼株式会社
- ・日本農薬株式会社
- ・一般社団法人家畜改良事業団
- ・坪田塾
- ・JA 東日本くみあい飼料株式会社
- ・中部飼料株式会社

学部研究科の教員や学生の皆さんが多数参加し、活発に交流が行われました。さまざまな情報交換が行われ、進路に関する情報を求める学生・院生、また優秀な人材を求める企業にとっても大変有意義な催しとなりました。

この後、同窓会の紹介やケータリングによる懇親会も開催され、賑やかなホームカミングデーの1日となりました。



〈同窓生在籍企業紹介の様子〉



〈懇親会の様子〉

人事異動 (平成 30 年 1 月～ 12 月)

日付	氏名	異動内容	職名	所属
H30.1.1	太田垣 駿吾	昇格	講師	大学院生命農学研究科生物機構・機能科学専攻資源生物機能学
H30.3.31	後藤 寛貴	退職	特任助教	大学院生命農学研究科生物機構・機能科学専攻生物機能分化学
H30.3.31	横地 秀行	定年退職	准教授	大学院生命農学研究科生物圏資源学専攻生物材料科学
H30.3.31	佐々木 康壽	定年退職	教授	大学院生命農学研究科生物圏資源学専攻生物材料科学
H30.3.31	近藤 稔	定年退職	助教	大学院生命農学研究科生物圏資源学専攻地域資源管理学
H30.3.31	本田 真己	退職	副技師	全学技術センター分析・物質技術支援室
H30.3.31	鈴木 美奈子	退職	図書職員	附属図書館東山地区図書課農学図書係
H30.3.31	柘植 尚志	退職	教授	大学院生命農学研究科附属フィールド科学教育研究センター
H30.4.1	馬 特	採用	特任助教	大学院生命農学研究科名古屋大学・カセサート大学国際連携生命農学専攻
H30.4.1	木羽 隆敏	採用	准教授	大学院生命農学研究科応用生命科学専攻
H30.4.1	松山 秀一	採用	准教授	大学院生命農学研究科附属フィールド科学教育研究センター
H30.4.1	石田 祐加	配置換	事務職員	農学部・生命農学研究科人事係
H30.4.1	鈴木 孝幸	昇格	准教授	大学院生命農学研究科附属鳥類バイオサイエンス研究センター
H30.4.1	田中 奈月	再採用	特任助教	高等研究院
H30.4.1	金山 辰弥	配置換	係長	農学部・生命農学研究科経理係
H30.4.1	田中 幸恵	昇格	図書系主任	附属図書館東山地区図書課農学図書係
H30.4.1	樋田 浩和	配置換	事務長	農学部・生命農学研究科事務部
H30.4.30	蜂谷 卓士	退職	特任助教	高等研究院
H30.5.1	犬飼 義明	昇格	教授	農学国際教育研究センター研究展開部門
H30.5.1	田畑 亮	配置換	特任講師	大学院生命農学研究科応用生命科学専攻
H30.6.1	藤澤 千尋	採用	技術職員	全学技術センター分析・物質技術支援室
H30.7.1	江崎 有子	配置換	主任	農学部・生命農学研究科管理係
H30.7.1	白藤 伊緒理	配置換	事務職員	農学部・生命農学研究科用度係
H30.7.1	横井 詠子	配置換	係長	農学部・生命農学研究科教務学生係
H30.8.31	西村 岳志	退職	特任助教	大学院生命農学研究科応用生命科学専攻
H30.9.1	高原 照直	昇格	講師	大学院生命農学研究科応用生命科学専攻
H30.9.30	森田(寺尾) 美代	退職	教授	大学院生命農学研究科応用生命科学専攻
H30.10.1	白木 利浩	配置換	事務長補佐	農学部・生命農学研究科事務部

農学部同窓会ホームページ案内

農学部同窓会の活動や、農学部研究室の変遷などに関する情報は、農学部同窓会ホームページ (<https://www.agr.nagoya-u.ac.jp/~dosokai/>) に掲載中です。住所変更の案内もございます。ぜひご覧ください。ホームページに対するご意見、ご要望等ございましたらぜひお寄せください。(担当：一柳 ichiyana@agr.nagoya-u.ac.jp)

平成29年度事業報告

- 1) 卒業50周年記念祝賀会の開催
平成29年6月10日、名古屋大学農学部大会議室において第13回卒業生の卒業50周年記念祝賀会を農学部談話会と共同で開催した。
- 2) 総会、講演会、懇親会の開催
平成29年6月10日、名古屋大学農学部において総会を行った。
総会終了後、松浦純生氏〔京都大学防災研究所地盤災害研究部門 傾斜地保全研究分野教授、第25回（昭和54年3月）農学部林学科卒業〕による講演会「ポセイドン号沈没の謎に迫る」を開催した。講演会終了後、名古屋大学「レストラン花の木」にて懇親会を開催した。
- 3) 卒業・修了祝賀会の開催
平成30年3月26日に第7講義室にて卒業・修了祝賀会を開催した。
- 4) 会報「セコイア通信」の発行
平成30年3月に発行した。
- 5) ホームページの作成と管理
同窓会員の情報交換を促進し、活動の状況を広く会員に知ってもらうことを目的に、同窓会ホームページのリニューアルを行った。
- 6) 同窓会名簿の管理
全学同窓会名簿システムと連携し、同窓会名簿データの更新を行った。また要請に基づき名簿情報の提供を行った。
- 7) 全学同窓会への協力
全学同窓会幹事会に役員を出し、運営に協力した。
- 8) 新規事業の検討および実施
農学部同窓会 OB 会および学生会員同士の交流を活性化するための新規事業の実施を検討した。事業の1つとして、平成30年1月31日に同窓会就職支援企画を開催し、学生約30名が参加した。
- 9) 評議員制度の実質化
同窓会会員の交流の場を提供し、新たな会員ネットワーク拡大と活動活発化の機会を増やすため、評議員制度の実質化について検討した。

平成30年度事業計画案

- 1) 卒業50周年記念祝賀会の開催
平成30年6月9日、第14回卒業生の卒業50周年記念祝賀会を開催する。
- 2) 総会、講演会、懇親会の開催
平成30年6月9日、名古屋大学農学部において総会を行う。
総会終了後、吉木淳氏（理化学研究所バイオリソース研究センター実験動物開発室 室長、第31回（昭和60年3月）農学部畜産学科卒業）による講演会「実験動物マウス：高次生命機能の解明と疾患克服のためのモデル生物」を開催する。講演会終了後、名古屋大学「レストラン花の木」にて懇親会を開催する。
- 3) 卒業・修了祝賀会の開催
平成31年3月25日に第7講義室にて卒業・修了祝賀会を開催する。
- 4) 会報「セコイア通信」の発行
平成31年3月に発行する。
- 5) ホームページの作成と管理
同窓会員の情報交換を促進し、活動の状況を広く会員に知ってもらうことを目的に、同窓会ホームページの充実をはかる。
- 6) 同窓会名簿の発行および管理
同窓会名簿を発行すると共に、全学同窓会名簿システムと連携して名簿データの更新を行う。また要請に基づき名簿情報の提供を行う。
- 7) 全学同窓会への協力
全学同窓会幹事会に役員を出し、運営に協力する。
- 8) 新規事業の実施
農学部同窓会 OB 会および学生会員同士の交流を活性化するため、新規事業を企画・実施する。
- 9) 評議員制度の実質化
評議員制度の実質化を図ることを目的として、ホームカミングデイの日に評議員会を開催する。

事務局だより

事務局では農学部同窓会会員録データの改訂を行っています。転居および転勤の際は、同窓会事務局（dosokai@agr.nagoya-u.ac.jp）までご連絡ください。今後も会員の皆様からのご質問・ご要望にお応えして参りたいと考えております。ご支援・ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

名古屋大学農学部同窓会 平成29年度決算

【収入の部】		平成29年4月1日～平成30年3月31日			
費目	決算	細目	金額	備考	
会費等	3,515,234	永一般会費 寄付金 広告掲載費	1,220,000 335,000 1,780,234 180,000	61名 67名 94名+農学部自治会(¥1,115,610) +沖長官祝賀会(¥25,624) 12件	
第13回卒業50周年祝賀会費	58,000		58,000	29名	
平成29年度総会懇親会費	27,000		27,000	27名	
前年度繰越金	21,684,201				
合計	25,284,435				
	(実質収入)		3,600,234)		
【支出の部】		平成29年度決算		備考	
費目	決算	細目	金額	備考	
会報発行費	1,315,310	会報印刷・発送 振込手数料	1,313,582 1,728	9500部(8316部発送) 2件	
平成29年度総会	236,000	講師講演料 講師交通費 役員親会通費	30,000 15,000 41,000 150,000	3名	
第13回卒業50周年祝賀会	108,033	飲事食代 飲記念食品代	86,000 22,033 133,370 130,000	案内状・写真印刷・発送	
卒業・修了祝賀会	278,370	役員交通費	15,000	2件	
役員報酬	144,000	役員報酬	144,000	12名×12,000	
ホームページ制作費	189,000			ホームページ作成代	
支部支援金	90,576	関西支部 振込手数料	60,000 30,000 576	2件	
アルバイト代	250,000			事務補助	
郵便振替手数料	25,858				
その他諸費用	57,655	交通費 課税 談話会出席 事務費	30,180 16,655 10,000 820	学外理事理事会および支部総会出席 役員報酬・講演料・アルバイト代 2名×2回、1名×1回 請求書発送・事務連絡	
次年度繰越金	22,589,633				
合計	25,284,435				
	(実質支出)		2,694,802)		

名古屋大学農学部同窓会 平成30年度予算

【収入の部】		平成30年4月1日～平成31年3月31日			
費目	金額	細目	金額	備考	
会費等	1,990,000	永一般会費 寄付金 広告掲載費	1,200,000 250,000 420,000 120,000	60名 50名 70名 8件	
第14回卒業50周年祝賀会・談話会会費	70,000			35名	
平成30年度総会懇親会費	35,000			35名	
前年度繰越金	22,589,633				
合計	24,684,633				
	(実質収入)		2,095,000)		
【支出の部】		平成30年度予算		備考	
費目	金額	細目	金額	備考	
会報発行費	1,400,000			9800部(8700部発送)	
平成30年度総会	221,000	講師講演料 講師交通費 役員親会通費	30,000 15,000 41,000 135,000	3名	
第14回卒業50周年祝賀会	140,000	飲事食代 飲記念食品代	100,000 40,000 130,000 180,000	印刷・発送	
卒業・修了祝賀会	310,000				
新規事業	250,000				
ホームページ管理費	50,000				
役員報酬	144,000		144,000	12名×12,000	
支部支援金	90,000	関西支部	60,000 30,000	平成30年度分 平成30年度分	
アルバイト代	250,000			事務補助	
郵便振替手数料	22,000				
その他諸費用	75,000	交通費 課税 談話会参加 事務費	26,000 12,000 17,000 20,000	学外理事理事会および支部総会出席 3名年2回 役員報酬・講演料・アルバイト代 発送、コピー	
剰余金	21,732,633				
合計	24,684,633				
	(実質支出)		2,952,000)		

関東支部だより

関東支部長 石川 靖文 (S56食 D)

関東支部では、昨平成30年11月17日(土)、東京神田神保町学士会館203号室で第21回総会を開催した。参加者は、申込段階では37名(ゲスト4名、協賛2名、特別2名、会員29名)であったが、当日の急な都合で2名が欠席、最終的に35名となった。協賛枠では、「名古屋大学全学同窓会」関東支部事務局長岸徹さん(理S46化 M)と工学部化学系同窓会「鏡友会」関東支部長新井清隆さん(工 S47応化 M)が、特別枠では、学士会事務局会員企画課の池田隆太郎さんと市川真爾マシューさんが、それぞれ参加された。

総会の部では、小職から支部の現況報告と規則改正の提案を行い、次いで若松利男支部新監査役(S49食化 M)が、会計・監査報告を行った。

講演の部の司会進行は、小西千晶支部幹事(H2林産)が務めたが、元放射線医学総合研究所の木村健一さん(S36畜 M)に「福島県海産魚介類への放射能の影響および水産業の現状」の最新報告を、森林化学研究室教授 福島和彦先生(H2林産 D)に「木の新しい価値をつくる」の講演を、名大ワンダーフォーゲル部OBの宮木建雄さん(S42農)と岡田常義さん(工 S42化)に「ザック担いでイザベラ・バードを辿る」の講演を、それぞれしていただいた。何れも「福島」が関係し、講演者の年齢を四捨五入すると60・70・80歳、纏めて【福島三代(題)】が今回のメタ・テーマであった。3つの講演の概要は、一般社団法人学士会の総合情報誌『NU7』本年5月号に一括掲載の予定である。

支部の現況報告では、支部運営の統治整備の一環として、支部銀行口座の開設と監査役設置、およびこれに伴う規則の改定と監査役候補を提案し承認を得た。新就任の若松監査役による「会計・監査報告」は、支部としては初めてのことであった。その他、卒年別担当幹事制についても提案し、大方の了解を得た。今後は、その方向で支部の体制作りを進めていきたい。

木村さんの『福島県海産魚介類』は、福島県のモニタリング検査に協力したもので、海水中の放射性セシウム濃度($^{134}\text{Cs} + ^{137}\text{Cs}$)と海産魚介類中でのその、7年間に亘る調査の、纏まったばかりの結果を報告していただいた。結論的には、①約54,000体を検査し安全を確認、②放射能汚染の原因となった海水中の放射能は、ほぼ震災前の水準に回復、③海産魚介類の放射能は、体外への排出、世代交代や成長による希釈により、ほぼ不検出となった——とのことであった。

ちなみに、平成23年(2011)3月の東日本大震災当時、木村さんは、大病が癒えたばかりの後期高齢者であった。大震災の惨状に心を痛め、自分も何か力になれるか?——と自問、一念発起してのボランティア活動であったが、結果的に、これがご本人の健康回復・増進に大きく寄与したとのことであった。聴講者からは、「魚のことは余り報道されないので心配だったが、

福島県の現状がよく理解できた」「高齢でも木村さんのように頑張れる者になりたい」などの声があった。

福島先生の『木の新しい価値』は、地球温暖化とパリ協定・SDGs(Sustainable Development Goals)を念頭に、そのためのソリューションを森林バイオマスの高次での有効活用に見出し、Future Earthといった新しい枠組の中で、「木の国、日本」の中山間地域に新産業を創成し、日本経済を牽引するという、スケールの大きな講演であった。ちなみに、わが国の森林2,500万haにおける毎年の木材生長量は約1億 m^3 で、これが安価・安定的に供給できる仕組ができれば、現在消費されているプラスチック原料(石油)を代替できるだけの量が供給可能とのことであった。

そして、これを実現するための木質由来新材料技術のいくつかが紹介された。有用な建築構造材として、既にヨーロッパで活用されているCLT(Cross Laminated Timber 直交集成板)、生産・廃棄における環境負荷が小さくアラミド繊維並の強靱さを持つCNF(Cellulose Nano Fiber)、Poly Ethylene Glycolによる改質リグニンをういた工業用プラスチック素材(自動車内外装部品)の開発などである。特に、改質リグニン樹脂を石油由来樹脂の代替とする用途の検討は、わが国の将来の貿易・産業構造を見据える上でも重要で、その行方が注目されているとのことであった。

宮木さん・岡田さんによる『バードを辿る』は、明治11年(1878)5月に来日、8月までのほぼ3ヶ月間、横浜から東北・北海道(蝦夷地)を旅し「日本奥地紀行」を著した英国の女性旅行探検家イザベラ・L・バード(Isabella Lucy Bird)について、彼女の足跡を忠実に辿り、往時を追体験しつつ、改めて「日本」について考えるというものであった。ワンゲル部OBの都合11回、延人数109名、23泊34日、足掛け6年にわたる“壮挙”は、同名の書籍として、平成29年(2017)9月、あけび書房から出版され、高い評価を博してる。

講演では、まず宮木さんが全体の趣旨を説明し、次いで岡田さんが旅の写真を映しながら解説、美しい風景や参加者の行路写真を主体に、先々でのエピソード、感想等を交えながらの楽しいものであった。病を抱えながら「体が動くうちは、好きなことをして……」と、“峠越え”に挑んだメンバーもいたとのことで、熟年の過ごし方を考える上でも大いに参考になった。

一連の濃密な講演の後は、リラックスタイムとして、



森中定治さん (S47農) に、「ブッチーニ オペラ西部の娘から アリア『やがて来る自由の日』」のテノール独唱をイタリア語で披露していただいた。次いで森中さん指揮の下、学生歌「若き我等」を参加者全員で斉唱した。その後、木村さん、福島先生、宮木さん、岡田さんを囲み全員で記念写真を撮影、一旦休憩の後、懇親会の運びとなった。

懇親会では、全学同窓会 岸さんの発声で、農学部酌清酒「なごみ桜」で乾杯した後、歓談に入った。講演3本で懇親会の時間にしわ寄せしてしまったが、参加者一同、大いに飲食し、大いに語り、大いに交歓した。この間『バードを辿る』の著者サイン本の販売も行い、持参7部を完売した。新卒の参加者にも挨拶していただいた。懇親会后、今回初めての試みとして、学生会館内カフェ&ビアパブ「SEVEN'S HOUSE」で講演ゲスト4名を囲んでの二次会を開催した。12名の参加であったが、うち解けた雰囲気の中、多種・多岐・多方面の話題が湧き出すふうで、遅くまで会話を楽しんだ。

次回第22回総会は、本年11月30日 (土) 13:30 ~ 17:30 学生会館302号室で開催の予定である。また別途、関東地域の新卒者を対象とした歓迎昼食会を5月25日 (土) 学生会館内和食レストラン「二色」(にしき) で開催の予定である。いずれへも多数のご参加をお待ちしている。

支部 HP : <http://www.nua-alumkanto.sakura.ne.jp/>
支部連絡先 E-mail : alum-kan@agr.nagoya-u.ac.jp

名古屋大学農学部同窓会関西支部だより

関西支部長 加藤 壽郎 (昭和45農 M)

関西支部は、発足からはや14年となりました。毎年、11月第二土曜日には、同窓会総会や懇親会を開催し、相互の親睦を図っております。2018年度は、11月10日土曜日の10時から15時まで、大阪の中央電気倶楽部で、同窓会を開催することができました。例年参加されている方がご都合によりご参加できなかったこともあり、14名の参加と、少人数ではありましたが、和気あいあいと楽しい一日を過ごすことができました。

2018年は、日本全国で天災や猛暑が続き大変な年となりました。関西地区も、6月に大阪北摂地区で大きな地震があり、甚大な被害を受けました。また、夏には大変な猛暑が続き、最高気温35度を超えるのが当たり前のような毎日が続きました。さらに、9月には台風21号に襲われ、全国的にも有名となった、関西空港の浸水被害や連絡橋の大型船衝突による破損をはじめ、様々な被害を被りました。こんな異常気象は、やはり地球温暖化が進んでいるからなのかと、思っていたところ、今年度の同窓会では、ご講演いただいた京都府立大学教授の田中先生に、温暖化についての解説から始まる興味深いお話をいただきました。田中先生は、名古屋大学農学部林学科博士課程を1981年に修了され、東京大学、三



重大学でご活躍の後、1998年より、京都府立大学の教授として森林分野の研究、指導にあたられています。

この度は日本の森林の現状とソサエティ 5.0時代の森林管理と題してご講演いただきました。現在起こっている全世界的な異常気象は、まさに地球温暖化の進行によって引き起こされているのではないかといいことですが、この気温上昇を何とか2°C以内に抑えたいと世界的に地球温暖化対策活動が進んでいます。実は、約6000年前の縄文期に、現在よりも約2°C高い時期があったとのこと。平均気温が2°C高いと、森林の生態にも大きな影響が表れるということで、それをヤマモモの分布域の変化によってご説明いただきました。小生は、よく東北地方を旅行しますが、旅行中、しばしば、立派な縄文遺跡に出くわします。あのように雪深い、寒い地域で、縄文時代の人たちはよく生活したものだ、疑問に思っていたのですが、当時は今より2°C高く、植生も違って、食べ物も豊富だったんだろうと、納得がきました。森林には、多様な機能や価値があるということは、よく理解しているつもりですが、今、日本の森林には様々な危機にめんしているようです。戦後植林された人工林は、まさに伐採可能な時期に達しているとのことですが、それをうまく伐採し、利用する体制が十分に整っていないこと、また、松枯れ、ナラ枯れ、野生動物による食害などによる被害など、解決していかなくてはならない課題が山積しているようです。そんな状況の中で、精密森林管理を支える技術であるLiDARや地上レーザーについて、また、あらたな森林管理システムの構築のための森林経営管理法などについてご説明いただきました。

午前中の総会、講演会を終えた後、午後は楽しい懇親会を行いました。例年、3時間の長丁場となる懇親会です。出席者全員に、近況をお話いただくため、このようにゆったりとした時間をとっています。皆様の体験談、現在取り組んでいること、これからやっていきたいことなど、様々なお話は、それぞれ面白く、また、勉強になることが多く、本当に幸せな時間を過ごすことができました。同窓会に、まだ参加されたことのない方、是非一度、お立ち寄りください。名古屋大学農学部と同じ釜の飯を食った私たちですから、すぐに溶け合っ、楽しい時間が過ごせますこと、約束いたします。また、関西地区にお住まいでない方もご参加を歓迎しています。毎年、四国地方から参加される方もおられます。遠いところから

お越しになって、頭が下がるおもいですが…。2019年度は、第15回総会を11月9日土曜日、10:00～15:00に実施する予定です。連絡先は以下の通りですので、ご参加ご希望の方は、是非、ご一報ください。

(事務局) 寺前 朋浩

〒669-1103 兵庫県西宮市生瀬東町37-23

e-mail: rikatomo@ares.eonet.ne.jp

名大遠州会だより

佐々木 健 (平成5年畜産)

名大遠州会は、静岡県西部(大井川以西)に居住または勤務する名古屋大学、大学院またはその前身校出身者から構成され、平成8年に設立されました。同窓会を毎年、また総会は隔年で開催しています。本年は6月2日(土)に名古屋からの来賓をお迎えし、会員約70名が出席して総会ならびに同窓会を開催しました。

最初に恒例となった出席者での写真撮影を行い、次いで南方遠州会会長の挨拶に続き、黒木遠州会副会長を議長に選出して第12回総会に入りました。総会では、平成26、27年度の事業報告、会計報告の審議・承認、同時に新役員の選出・承認が行なわれました。議事終了後、松尾総長、伊藤全学同窓会副会長、和田代表幹事からご挨拶があり、総会は終了となりました。なお、この総会については地元紙2紙の取材があり、開催予告や開催内容が紙面に掲載されました。

小休憩の後に、奥村幹事の司会、大久保名誉会長の乾杯発声で懇親会を盛大に開催しました。懇親会では名大オリジナル商品や各幹事の提供品を景品としてビンゴゲームが行われ、老若男女を問わず出席者は大いに盛り上がり、21時に終了となりました。

さて、本年は第24回同窓会懇親会をオークラクトシティホテル浜松にて、6月8日(土)18:00に開催予定です。遠州会会員の皆様には例年通り4月頃に案内状を郵送しますので、奮ってのご参加をよろしくお願いいたします。また、遠州地区にお住いでこのセコイア通信をお読みの方(名古屋大学農学部や大学院生命農学研究科の卒業生)で、本「遠州会」にご興味をお持ちの方は、当方にメール等でご連絡くださればご案内いたします。

最後に、せっかくですので今年は紙面をお借りして、この遠州会(同窓会)が開催される浜松について少し



紹介しようと思います。浜松は名古屋に比べると夏はやや涼しく冬は温暖な気候で、それもあってか地域性が比較的のんびりしています。私も名古屋から浜松に引っ越した当初は、「こんなにのんびりしていて大丈夫か!」などと思いましたが、15年以上経過して今では私もすっかり「のんびり」しています。一方で、お隣の東三河地区と同様、風が強いのが少々厄介で、風速10mくらいの日は珍しくありません。浜松の中心部は都市化していますが、郊外に相当するところでは田畑も多く見られ農業も比較的盛んです。また、自然も豊かで都市部から車で20～30分程度で里山地区や山間部の入り口に到達し、畜産業や果樹園を営む農家も目に留まります。さらに、浜名湖や遠州灘にも接するため水産業も盛んで、スーパー等では地魚なども手に入ります。ということで、紙面にも限りがありますので今回はこれくらいに留め、続きは次回にしたいと思います。

連絡先: 遠州会農学部幹事 佐々木健

〒431-3192 浜松市東区半田山1-20-1

浜松医科大学 器官組織解剖学講座

Tel: 053-435-2293 Fax: 053-435-2290

Email: tsasaki@hama-med.ac.jp

農学部談話会だより

農学部談話会世話人代表 織田 銈一

農学部談話会は旧各学科(農、林、畜、農芸化学、林産、食品工業)から選出した元教授を世話人として2002年に発足しました。農学部を退職後相互に親睦し、また現役との交流を図る場、気楽に歓談する場として設けられました。現在の規約では「相互の親睦連絡を図り、合わせて名古屋大学農学部及び同大学院生命農学研究科の発展に寄与することを目的」とし、年間3回(11月、3月、6月の第2金曜日)の総会(例会)を開催すること、世話人は現在4名(各専攻対応)で任期2年となっています。

2002年10月11日の第1回から2018年11月9日には第50回を開催することができました。内容としては、元教職員からは退職後の活動や現役時代の業績・発想、大学行政への要望、現役の教員からは最近のトピックや新たな研究組織の活動など、多彩な話題が提供されています。談話会の特徴としてはどの回においても学部長・研究科長(または代理)から学部・研究科及び大学の動きなど最新の情報が提供されていたことが挙げられるかもしれません。2002年の第1回から2008年の第19回までの記録が2009年6月6日付で「農学部談話会第1集」として齋藤・寺島・梅村により編集されています。あとがきには「農学部のみなさんが談話会を広く承知され、この活動が今後とも持続されることを願って編集しました。」と書かれています。ホームページを作って、活動がわかるようにしたらどうかという要望も届いています。

第49回までは現任教員である同窓会役員のサポートを受けてきましたが、第50回からは独自に活動が求められるようになりました。2018年11月7日に研究科長(学

- ・紙つぶて：意地で気分を好転させる 東村博子副理事・生命農学研究科教授 2018.6.5 中日 (夕刊)
- ・紙つぶて：どう生きるか 東村博子副理事・生命農学研究科教授 2018.6.12 中日 (夕刊)
- ・紙つぶて：死してこそ成し遂げ 東村博子副理事・生命農学研究科教授 2018.6.19 中日 (夕刊)
- ・紙つぶて：今を良く生きる 東村博子副理事・生命農学研究科教授 2018.6.26 中日 (朝刊)
- ・先端人：接ぎ木 食糧危機救う 野田口理孝 生命農学研究科助教 2018.7.1 朝日 (朝刊)
- ・「浮きイネ」の仕組みと起源を解明 芦苺基行 生物機能開発利用研究センター教授 2018.7.13 中日 (朝刊) 他2社
- ・先端人：サボテン 強さの秘密は 園芸学 堀部貴紀中部大学講師 (本学卒業生) 2018.7.18 朝日 (朝刊)
- ・名古屋大学農学部と大学院生命農学研究科が東海農政局と連携覚書を結ぶ 2018.8.14 日刊工業
- ・小田裕昭生命農学研究科准教授は砂糖の取りすぎによる脂質代謝異常 (脂肪肝、高脂血症) は時間制限摂取により軽減されることを発見 2018.8.16 中日 (朝刊) 他1社
- ・佐塚隆志生物機能開発利用研究センター准教授らはソルガムにおける乾汁性決定遺伝子を発見 2018.9.7 科学新聞
- ・人口ゼロからの再生 原発被災地へヒント 未来を考える 福島大学教授生源寺眞一氏 (元本学教授) 2018.9.13 日経 (朝刊)
- ・先端人：発酵・醸造の魅力 世界へ 名城大学加藤雅士教授 (本学卒業生) 2018.9.16 朝日 (朝刊)
- ・秋の園遊会招待者：松尾総長、山下興亜本学名誉教授、福和伸夫環境学研究科教授 2018.10.26 読売 (朝刊)
- ・IEEE の2020年会長に福田俊男本学名誉教授が当選 2018.10.29 日経 (朝刊)
- ・小田裕昭生命農学研究科准教授は朝食を抜くと体重が増える原因が体内時計のずれであったことをマウスを使った実験で解明 2018.11.1 中日 (朝刊) 他3社
- ・毎日出版文化賞の人々②：染色体を突き詰める「性の進化史」松田洋一生命農学研究科教授著 2018.11.14 毎日 (夕刊)
- ・名古屋大学大学院生命農学研究科と西オーストラリア大学理学部が連携するジョイント・ディグリープログラム・国際連携生命農学専攻を2019年4月に開設 2018.11.29 日刊工業
- ・石川明生命農学研究科准教授は肥満を抑制する遺伝子を同定 2018.12.6 朝日 (朝刊) 他2社
- ・第72回毎日出版文化賞 松田洋一生命農学研究科教授 2018.12.7 毎日 (夕刊)
- ・シンポジウム「あなたの食、今と未来～変化する食と農林水産業」開催 福島大学生源寺眞一教授 (元本学教授) 2018.12.18 中日 (朝刊)

同窓会寄付者一覧

(2018.1.27～2019.1.23)

本年度、農学部同窓会に対し以下の方々より寄付金をいただきました。ありがとうございました。(敬称略)

旭 正	生川 延平	生永 治彦	井澤 佳昭	伊藤 達人
伊藤 正仁	井戸 大也	井上 忠彦	伊部 智善	今井 正樹
大野 光義	大橋 偉郎	岡田 鉦彦	岡田 安司	小野 咲奈
春日井 治	加藤 壽郎	加藤 政泰	加藤真理子	加藤 義裕
神谷 典明	木村(丹羽)邦彦	木山 和義	栗本 重夫	近藤 壽男
澤木 良次	下向 結貴	柴田 邦善	杉山 茂樹	鈴木 茂之
関 稔	仙石 三郎	竹内(鶴見)利江	武村みどり	田嶋 一郎
田中 静幸	外村 常男	豊島 義之	中塚 大瑛	中野 元
中脇 修二	成瀬 和也	野間 順一	橋本 和彦	長谷川規隆
長谷川靖彦	八田 洋章	平林 良一	福井 敏夫	福原 壮
堀川 知廣	前田 和彦	松崎 敦志	松沢るみ子	松田 寛
松本(金田)和子	水落 頸美	水野 修一	村瀬 香	森 佑美子
森信 光夫	山田 哲也	山田 壽美	山本 哲也	山本裕二郎
山本 義典	若松 利男	渡辺 広次	渡邊 徹	

全学同窓会便り

社会に開かれた大学として名古屋大学が発展していくためには、大学と同窓会の緊密な連携が必要とされており、大学と同窓会は連携して社会に一層の情報公開を行い、社会から種々のニーズを汲み上げる必要があります。また、同窓生にとって、専門分野を越えての情報交流は従来にも増して重要になってきました。こうした時代背景の中、全学的な見地に立って、部局同窓会と連携しながら卒業生、学生、教職員の交流の場を提供し、名古屋大学全体の種々の活動に関する情報を発信することを目的として、平成14年に全学同窓会組織が設立されました。現在、農学部同窓会からは3名が全学同窓会幹事として参画しています。

全学同窓会は、平成30年度、以下の活動を行いましたのでご報告いたします。

1) 社会貢献人材バンクの名簿整備

大学が運営する「卒業生等名簿管理システム」の整備と運営に協力し、部局同窓会に提供しました。

2) 財政基盤整備

同窓会カードの普及、およびカード優待店舗の拡大戦略を検討しました。また、新入生の保護者に対し「活動協力金のお願い」を入学手続き時および入学式当日に配布し全学同窓会活動の支援のお願いしました。

3) 拠点形成

関東支部講演・交流会(平成31年2月9日)、遠州会第12回総会第23回同窓会(平成30年6月2日)、関西支部第13回総会・講演会(平成30年5月12日)等、各支

部との連携・支援を行いました。また、スリランカ支部設立の検討を継続して行い海外との連携強化を推進しました。

4) 全学同窓会活動の運営基盤整備

第2回「名古屋大学同窓会サミット」を平成30年6月16日に野依記念学術交流館で開催しました。また、12月21日に学士会と共催で、榊原定征全学同窓会副会長による講演会を実施し、その後に夕食会を開催しました。

5) 学生支援

寄附講義「キャリア形成論」(卒業生が講師を務める全学教養科目)の支援を行いました。

名古屋大学人力飛行機製作サークル AirCraft 鳥人間コンテスト出場及び優勝に向けての機体製作等、学生活動を支援しました。

6) 大学支援

名古屋大学基金活動を支援しました。また、平成30年10月20日に開催されたホームカミングデーを共催し参加者及びスタッフに昼食を提供しました。さらに、ホームカミングデーにおいて「農学部同窓生在籍企業の紹介」事業等を支援しました。

7) 広報活動

Newsletter No. 30(平成30年10月)、No. 31(平成31年3月)等を発行しました。また、全会員に情報発信する費用として300万円を大学に寄付しました。

各種高圧ガス及び設備の設計・施工
高圧ガス関連機器・各種実験機器



有限会社
アルファシステム

〒465-0013 名古屋市名東区社口1-1004
TEL. 052-776-4567 FAX. 052-776-4568
<http://www.alphasystem.biz>



印刷業から情報デザイン業へ

Info. + Design

長年培った表現技術を活かし、「印刷業」から「情報デザイン業」へと進化していきます。

販促支援サービス

マニュアルサービス

P&Dサービス

教育出版支援サービス

株式会社 **クワイックス**

<http://www.kwix.co.jp>

■本 社 〒448-0025 愛知県刈谷市幸町2-2
TEL 0566-24-5511 FAX 0566-26-0200

代表取締役社長 岡本 泰

全国同窓会名簿作製・同窓会アドバイザー

SALAT
Salat Corporation

株式会社 サラト <http://www.salat.co.jp/>

本社 兵庫県姫路市北条宮の町172
Tel.079-284-1380 Fax.079-224-7746

竹本油脂の挑戦は
ごま油、そしてスペシャリティケミカルへ
食卓から宇宙までひろがっています



竹本油脂株式会社

TAKEMOTO OIL&FAT CO.,LTD.

- 【本社・研究所】 愛知県蒲郡市
- 【事業内容】 特殊精密化学品(界面活性剤等)
ごま油の製造販売
- 【資本金/売上】 1億円/666億円(2016年)
- 【社員数】 584名(うち名大 生命農学出身者 35名)
- 【国内事業所】 東京 大阪 福岡
- 【海外拠点】 アメリカ 中国 台湾 インド

酒類、醤油、調味料、味噌、漬物、清涼飲料水の製造及び販売



盛田株式会社



【本社】〒460-0008
愛知県名古屋市中区栄一丁目7番34号 電話番号 052-229-1600
<http://moritakk.com/>

理化学器械・研究設備・光学機器・ガラス器具

主要取扱メーカー

アズワン	三洋電機
東京理化	タイテック
旭硝子	日本エイドー
久保田商事	アトナー
名古屋三立製作所	アドバンテック東洋



株式会社みずほ理化

〒468-0066 名古屋市天白区元八事一丁目33番地
TEL 052-831-8800
FAX 052-834-4117
E-mail: mizuhorika@k2.dion.ne.jp


mizkan
やがて、いのちが変わるもの。



農学部同窓会事務局では、広告の募集をしております。本会報の発行部数は、現在約9,900部で、本学農学部関係者に配布されています。会社の広告、同窓会の通知などにご利用下さい。

詳しくは、同窓会事務局まで。

個人情報の取り扱いについて

名古屋大学農学部同窓会では個人情報の正確で適切な管理に万全を期するため、会員データの管理を株式会社サラトへ委託しております。株式会社サラトは愛知県内約80校全国約1,500校の同窓会で会員データ管理を手がけ個人情報保護法に最も精通したプライバシーマーク取得企業です。なお、サラトは得られた個人情報を責任を持って厳重に管理し、個人情報を第三者に開示または提供しないことについて、名古屋大学農学部同窓会とサラトとの間で契約を取り交わしております。